

# 金魚売り

小川未明

青空文庫



たくさんな金魚の子が、おけの中で、あふ、あふとして泳いでいました。体じゆうがすつかり赤いのや、白と赤のまだらのや、頭のさきが、ちよつと黒いのや、いろいろあつたのです。それを前と後ろに二つのおけの中にいれて、肩にかついで、おじいさんは、春のさびしい道を歩いていました。

このおじいさんは、これらの金魚を仲間や、卸屋などから買ってきたのではありません。自分で卵から養成したのでありますから、ほんとうに、自分の子供のように、かわいく思っていたのです。

「これを買らなければならぬとは、なんと悲しいことだろう。」

こう、おじいさんは思つたのでした。

春の風は、やわらかに吹いて、おじいさんの顔をなで過ぎました。道端には、すみれや、たんぽぽ、あざみなどの花が、夢でも見ながら眠っているように咲いていました。あちらの野原は、かすんでいました。

いろいろの思い出は、おじいさんの頭の中にあらわれて、笑い声をたてたり、また悲しい泣き声をたてたかと思うと、いつのまにか、跡も形もなく消えてしまつて、さらに、新

しい、別の空想が、顔を出したのです。

人家のあるところまでくると、おじいさんは、

「金魚やい、金魚やい——。」と、呼びました。

子供たちが、その声を聞きつけて、どこからかたくさん集まってきました。その子供たちは、なんとなく乱暴そうに見えました。金魚の泳いでいる中へ棒をいれて、かきまわしかねないように見えました。おじいさんは、そうした子供たちには、売りたいとは思いませんでした。

「きれいな金魚だね。」

「僕は、こいのほうがいいな。」

「こいは、河にすんでいるだろう。」

「いつか、僕、釣りにいったら、大きなこいが、ぱくぱく、すぐ僕の釣りをしている前どころへ浮いたのを見たよ。」

「赤かったかい。」

「黒かった。すこし、赤かった。」

「うそでない。ほんとうだ。」

その乱暴らんぼうそうな子供こどもたちは、もう金魚きんぎよのことなんか忘れてしまつて、棒ぼうを持つて、戦争せんそうごっこをはじめたのです。

おじいさんは、笑い顔わらがおをして、子供こどもたちが無邪気むじゃきに遊あそんでいるのをながめていましたが、やがて、あちらへ歩あるいてゆきました。村むらを離はなれると、松まつの並木なみきのつづく街道かいどうへ出たのであります。その松まつの木の根ねに腰こしをかけて、じつと、おけの中なかにはいつているたくさんな金魚きんぎよの姿すがたをながめていました。こうして、おじいさんは、自分じぶんの育てた金魚きんぎよは、残のこらず目めの中なかに、はつきりとはいつていたのです。

長い道ながみちをおじいさんにかつがれて、知らぬ町まちから町まちへ、村むらから村むらへゆく間に、金魚きんぎよは、自分じぶんの兄きょうだい弟ていや、友ともだちと別わかれなければなりません。そして、それらの兄きょうだい弟ていや、友ともだちとは、永えいきゆう久くに、またいつしよに暮くらすこともなければ、泳およぐこともなかつたのです。もとより自分じぶんたちの生うまれて、育てそだてられた故郷こきようの小さな池いけへは帰かえることがなかつたでしょう。

金魚きんぎよは、なにもいわなかつたけれど、おじいさんは、よく、金魚きんぎよの心持こころもちがわかるようでした。あまり長い、毎まい日にちの旅たびにゆられて、中なかには、弱よわつた金魚きんぎよもありました。そんなのは、別べつの器うつわの中なかにいれて、みんなと別べつにしてやりました。なぜなら、達者たつしやで、

元気げんきのいいのがばかにするからです。そのことは、ちょうど人間にんげんの社会しゃかいにおけると違ちがいがありません。弱いよわものに対してたい、憐れあわむものもあれば、かえって、それをあざけり、いじめるようなものもありました。

おじいさんは、おけに鼻はなを打うたれたり、また揺ゆられたために弱よわった金魚きんぎよをいつそうかわいがってやりました。

ある日ひのこと、おじいさんは、金魚きんぎよのおけをかついで、「金魚きんぎよやい、金魚きんぎよやい——」と呼よびながら、小ちいさな町まちへはいつてきました。

そのとき、十二、三になる少しょう年ねんが、とある一軒けんの家うちから飛とび出だしてきて、いきいきとした目めでおじいさんを仰あおぎながら、

「金魚きんぎよを見みせておくれ。」といいました。

おじいさんは、おとなしい、よい子供こどもだと思おもいましたから、

「さあ、見みてください。」と、答こたえて、おけをおろして見みせました。

少しょう年ねんは、二つのおけの中なかにはいつている金魚きんぎよを熱心ねっしんに見みくらべていましたが、おじいさんが別べつにしておいた、弱よわった金魚きんぎよへ、その目めを移うつしたのです。

「この円まるい、尾おの長ながい金魚きんぎよをくださいな。」と、子供こどもはいいました。

「坊ちゃん、この金魚は、いい金魚ですけど、すこし弱っていますよ。」と、おじいさんは、目を細くして答えました。

「どうして弱っているの？」

「長い旅をして頭をおけて打って疲れているのですよ。」

おじいさんは、やさしい、いい子供だと思つて見ていました。

「僕、大事にして、この金魚を飼つてやろうかしらん……。」

「そうしてくだされば、金魚は喜びますよ。」と、おじいさんはいいました。

子供は、円い尾の長い、赤と白のまだらの金魚を買いました。そのほかにも二、三び

き買つて家の中へ入ろうとして、

「おじいさんは、また、こつちへやつてくるの？」と、少年は聞きました。

「また、来年きますよ。そして、金魚がじょうぶでいるか、お家へいつてみますよ。」

といいました。

少年は、うれしそうにして、金魚をいれ物にに入れて、家へはいりました。おじい

さんは、かわいがつていた金魚の行く末をおもいながら、人のよさそうな顔に笑いをた

たえて、荷をかつぐと子供のはいった家の方を見かえりながら去つたのでした。

「金魚やい、金魚やい——。」という声が、だんだん遠ざかってゆきました。おじいさんは、それから、いろいろな町を歩き、また村をまわって、春から、夏へと呼び歩いたのです。こうして、自分の育てた金魚は、方々の家へ買われてゆきました。

おじいさんから、弱った金魚を買った子供はその金魚をいたわってやりました。金魚は、急に、みんなから離れて、さびしくなりましたけれど、静かな明るい水の中で、二、三の友だちといっしょにおちつくことができたので、だんだん元気を恢復してきました。そして、五日たち、七日たつうちに、もとのじょうぶな体となつたのであります。

金魚は、水の中から、庭さきに、いろいろな咲いた花をながめました。また、ある夜はやわらかに照らす月の光をながめました。自分たちをかわいがってくれた、おじいさんの顔はふたたび、見ることはなかつたけれど、少年は毎日のように、水の中をのぞいて、餌をくれたり、新しい水をいれてくれたり、しんせつにしてくれたのであります。金魚は、だんだんおじいさんのことを忘れるようになりました。

夏が過ぎ、秋が逝き、冬となり、そしてまた、春がめぐってきました。

ある日のこと、少年は、外にあって、

「金魚やい、金魚やい——。」と、いう呼び声を聞いたのです。



「金魚売りがきた……。」と行って、彼は、すぐに、家の外へ飛び出てみました。心のうちで待っていた、去年金魚を買ったおじいさんでありました。

顔を見ると、おじいさんは、にっこり笑いました。

「坊ちゃん、去年の金魚は達者ですか？」と聞きました。おじいさんは、この子供が、弱った金魚を大事に育てようと言って、買ったことを忘れなかったのです。

「おじいさん、金魚は、みんなじょうぶで、大きくなりましたよ。」と、少年は答えました。

「どれ、どれ、私に見せてください。」と、行って、おじいさんは、山吹の花の咲いている庭さきへまわって、金魚のはいつている大きな鉢をのぞきました。

「よう、よう、大きくなった。」と行って、おじいさんは喜びました。

少年は、おじいさんから、二ひき金魚を買いました。おじいさんは、別に一ぴきいい金魚をくれたのです。

「おじいさん、また来年こっちへくるの？」と、別れる時分に、少年が聞きました。「坊ちゃん、達者でしたら、また、まいりますよ。」と、おじいさんは、答えました。

けれどかならずくるとはいいませんでした。おじいさんは、年を取ったから、もうこうし

て歩く<sup>ある</sup>のは難儀<sup>なんぎ</sup>となつて、静<sup>しず</sup>かに、故郷<sup>こきよう</sup>の圃<sup>はたけ</sup>でばらの花<sup>はな</sup>を造<sup>つく</sup>つて暮<sup>く</sup>らしたいと思<sup>おも</sup>つてい  
たからであります。

——一九二七・三作——

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1927（昭和2）年6月

※表題は底本では、「金魚《きんぎよ》売《う》り」となっています。

※初出時の表題は「金魚売」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 金魚売り

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>